

## 都会の中の静寂 ～クワイエット・ゾーン～

ニューヨーク事務所

ニューヨークの観光名所でもあり、現地市民にもレジャーの場として親しまれているセントラルパーク。そこは、春から夏にかけて、日光浴を楽しむ人々で溢れかえっている。そして、音楽を演奏している人々もたくさんいて、観光客や地元住民の耳を潤している。日本での路上パフォーマンスとは違い、この公園にいるパフォーマーの多くは、その演奏で生計を立てているのである。



セントラルパークの中でも『ベゼスタの噴水』の周りは、100年以上もパフォーマー達に愛されてきた場所であり、中には、ごく一部であるが、年に10数万ドルも稼ぐパフォーマーも居るといふ。(日本では考えられないことであるが、ニューヨーカーは平気で20ドル札を楽器ケースに放りこんで行く。) そんな『ベゼスタの噴水』の周りが5月下旬からクワイエット・ゾーン(ラジオ・楽器演奏禁止場所)に指定された。ゾーンを指定したのは、セントラル・パーク保護団体とニューヨーク市の公園・レクリエーション部門である。他にも、ストロベリー・フィールズ(ジョン・レノンのメモリアル庭園)を初め、クワイエット・ゾーン指定箇所は、近年増えている。

音楽文化活動を抑制する目的ではなく、文化振興の傍ら閑静な土地を確保する事が目的である、というのがニューヨーク市と公園保護団体の方針であり、指定理由でもある。確かにこの大都会において、閑静な場所を確保するのは非常に難しい。そのような場所を確保するためには、ある程度強制的な手段を選ばざるを得ないだろう。



しかし、一方パフォーマーにとっては、長年勤めてきた職場を追われるような、辛い措置かもしれない。自分にとって快適な新しい場所を見つけるのは、容易なことではない。クワイエット・ゾーンが指定されて1ヶ月が経った今、パフォーマーの反応は様々である。ある者は、別の場所を探し求め、ある者は、断固として長年親しんできたその場を離れない。(その結果、裁判に持ち込まれている例もあるようだ。)

セントラルパークで活動する、あるハープ奏者はこう言っていた。「私たちの居場所はどんどん狭くなっている。でもレディ・ガガ(有名ポップ・シンガー)は何をしても許される。私たちは力を併せて闘っていかなければならない。」 都会の中に閑静地を作ろうとする市・保護団体と、自らの活動場所を死守しようとするパフォーマー達との闘い ― 今後、この問題は長期に渡り議論が交わされる事になりそうである。

(石橋所長補佐 堺市派遣)